

大学院教員派遣研修での研究内容の概要

所属校	台東区立忍岡中学校	氏 名	伊藤 真知子
派遣大学院	東京学芸大学大学院	専攻・コース	教育学研究科 学校教育専攻
研究テーマ	英語学習への動機づけに関する研究		
<p>1 研究の目的（学校における現状、課題、課題を解決するための研究の位置づけ）</p> <p>①研究の背景</p> <p>「英語が使える日本人」の育成のための計画が、文部科学省より、提示された。現在の状況の改善のためのアクションとして、主に7つの柱が掲げられている。その中の第1の柱は、英語の授業の改善、第2は、英語の教員の指導力の向上及び指導体制の充実、第3は、英語学習のモチベーションの向上である。これにより習熟度別授業や小人数授業の実施など、指導方法の改善や、英語教師に対する研修の義務づけなど、さまざまな取り組みが行われている。そのような学習者の環境整備は重要であるが、学習者のモチベーションも重要であり、両方が働きあって、学習効果が高まる。</p> <p>学習者のモチベーションを高めるには、どのようにしたらよいか。特に、言語習得の為の学習は、私たちが母語を自然に身につけたように、学習時間（その言語に関わった時間）は本人の語学力に比例する。英語学習も授業以外で学習した時間（自主学習の時間）が必要である。</p> <p>では、どうしたら自主学習の時間が増えるか。コンピュータ、スポーツ、マンガなど、生徒たちは、自分の興味あることに関しては、自ら進んで取り組む。そこで、英語に興味をもつ生徒は、どのようなきっかけで、興味をもつようになったか、について研究を進めた。</p>			
<p>2 研究内容（方法・経緯・内容）</p> <p>①研究仮説・研究対象</p> <p>「英語学習への動機づけには、生徒の興味的一致・実践活動・教師との関わりが必要である」を基に研究をすすめた。研究対象者は、筆者の勤務する中学校3学年の生徒である。</p> <p>②研究方法・研究結果</p> <p>第1に、さまざまなアンケートを通して、生徒の興味・関心のある事柄を調べた。授業では、interaction のように他の生徒の情報について英語を通じて知ることに関心をもっていること、また、他の生徒の発表に興味をもっていることがわかった。</p> <p>授業以外では、ラジオやテレビや音楽や映画など、さまざまなものを通して、英語に触れることができる。また、英語の自由研究でもわかるように、人から与えられた課題よりも、自ら興味のあるものを見つけ調べる活動の方が、興味をもって取り組むことがわかった。</p> <p>第2に、実践的活動（生徒が「英語を使う」「英語が使えた」と実感できる学習活動）を授業に取り入れることで、生徒の反応が普段の授業とどのように異なるかを調べた。英語で自己表現をする授業は、普段の授業よりも積極的に取り組むことがわかった。特に「話す」「聞く」活動は、生徒にとって興味をもつ活動であることがわかった。</p> <p>第3に、「教師の支援」が学習意欲に影響を与えるかどうかを調べた。アンケートにより、教師の言葉かけや授業内容以外の余談の話の方が、授業内容よりも興味をもっていることがわかった。</p> <p>第4に、成績と学習行動で、生徒を6つのグループに分類し、筆者が彼らと関わることで、彼らの変化を観察し、そのような生徒とどのように関わっていくことが学習意欲を高められるか調べた。動機づけの要因は、全ての生徒に共通してあてはまるも</p>			

様式 1

のではなく、生徒によって必要な要因が異なることがわかった。例えば、学習意欲の高い生徒は、成績に関わらず、周りに左右されない自分の意志をもっており、自分の努力をきちんと評価することができる。それは、自分に自信があることが大切な要因となっている。自信をはぐくむには、人の期待・信頼も影響を与える。逆に家庭での過剰な介入は、自信を失わせる可能性があることがわかった。

第5に、それまでのアンケート調査や生徒の観察などの結果を通して、研究仮説を検証し、動機づけの要因を探求した。

この研究の結果として、①外発的動機づけ（本人に対して外的な要請により行動する）には、生徒の興味的一致・実践的活動・教師の支援が必要であるということ、②内発的動機づけ（外界からの要請がなくても、行動することによって得られるやりがいや喜びなどのために行動する）には、生徒の「好奇心」「自信」「自己表現」が必要であること、③生徒によって、動機づけの必要な要因が異なっていること、④生徒の動機づけを高めるためには、生徒への徹底した観察とコミュニケーションが必要であること、がわかった。

3 研究成果と課題

この研究を通して、授業以外で生徒と関わる時間を多くつくった。これによって、生徒の本音や今まで知らなかった事など、授業だけでは、わからなかったことを知ることができ、より厚い信頼関係を築くことができた。特に、学習意欲の低い生徒は、ゆっくりと話す機会がなく（生徒は進んで話しに来ない）、コミュニケーション不足である傾向であるが、今回の研究によって、彼らと関わる時間が増え、距離が縮まったように感じた。また、インタビューによって、授業中の学習行動が変化し、積極的に取り組むようになった生徒もいた。生徒とのコミュニケーションの大切さを改めて感じた。

課題としては、インタビュー調査の対象者が、学習意欲の高い生徒が大部分であったことである。学習意欲の低い生徒をより多く選び、6つの分類の生徒をバランス良く抽出すべきだったと思った。英語に興味をもたない生徒、動機づけされない生徒をどのようにとらえるか、どのように関わっていくかがこれからの課題である。

今回の研究の成果をこれからの学校生活に取り入れ、できるだけ多くの生徒が、英語の授業に意欲をもって取り組めるような授業、そして教師を目指していきたい。

大学院派遣研修成果活用状況

所 属 校	台東区立忍岡中学校	氏 名	伊藤 眞知子
派遣大学院	東京学芸大学大学院	専攻・コース	教育学研究科 学校教育専攻
研究テーマ	英語学習への動機づけに関する研究		
1	<p>①効果的な Team Teaching (T・T) の授業についての研究</p> <p>本校は、1学年の英語の授業については、1週間3時間の授業につき、2時間T・Tの授業が行われる。T・Tを組む担当の先生と次の授業の検討をし、また、それぞれの担当学年の生徒の様子など密に話し合いを進めてきた。</p> <p>②道徳教育の推進</p> <p>道徳の授業について研究し、推進してきた。各月ごと、各学年の道徳の授業時数を把握するとともに、年35時間を確保するように呼びかけ、取り組んだ。また、台東区の教育研究会の中学校道徳部に所属し、他校と道徳教育に関する情報を交換し、研修を深めた。そして、2学期に、本校の1学年で道徳の研究授業を行った。</p> <p>また、本校の校内研修会では、その時の道徳の研究授業の様子・協議会での話などを説明し、学校全体で研修を深めた。</p> <p>③心づくり委員会での活動</p> <p>台東区教育委員会による「心づくり委員会」に所属し、本校の生徒が取り組んでいる豊かな心をつくる活動(挨拶運動・奉仕活動)について、「心づくり新聞」(台東区内の新聞広告)で発表した。</p>		
2	<p>台東区教育研究会中学校道徳部の主催で、平成17年9月7日(水)に道徳の研究授業を行った。指導学級は、1年2組で、主題名は「集団生活の向上」4-1であった。また、この授業は、ゲストティーチャーを交えての道徳の授業であった。</p> <p>授業後、協議会が行われ、道徳の授業について研修を深めた。(添付資料の指導案参照)</p>		
所 属 校 で の 成 果 活 用	<p>委 員 会 ・ 研 修 会 で 成 果 活 用</p>		

様式 2

<p>3 成果を 生かした 研究 授業 等</p>	<p>研究結果により、生徒の動機づけを高めるために、1 学年対象の英語の授業で、主に 5 つの取り組みを行ってきた。</p> <p>①生徒の興味・関心事、だれでも取り組める事柄の導入 授業開始とともに、英単語の B i n g o を行い、生徒が興味をもてる事柄を授業に取り入れた。</p> <p>②実践的活動を導入 実践的活動とは、生徒が「英語を話せた」「英語を使った」と感じる活動であり、各学期にそのような活動を取り入れた。1 学期は自己紹介の発表、2・3 学期は、暗誦発表やクリスマスカードの作成の活動を行った。</p> <p>③生徒とのコミュニケーション 授業以外の時間（休み時間、放課後など）に生徒と積極的にコミュニケーションをとり、各生徒の様子を把握し、信頼関係を深めた。</p> <p>④動機づけされない生徒（英語に興味をもたない生徒）への働きかけ まず、単語練習などで積極的に取り組もうとしない生徒等とのコミュニケーションを大切にし、放課後など、補充学習の時間と同時に彼らとの信頼関係を築く時間を努めてつくった。</p> <p>⑤生徒の状況の把握 各学期に、生徒が記入した学期反省を参考に、生徒の状況を把握した。授業への取り組み、授業の感想など生徒の書いた内容を参考に、その後の授業の改善に取り組んだ。</p> <p>これらの取り組みにより、2 学期に行ったアンケートの結果では、授業が「楽しい」「とても楽しい」生徒は、116 名中 101 名となった。</p> <p>アンケート結果 （平成 17 年 12 月 18 日実施・対象 1 学年 116 名） 授業は とても楽しい（30 名）、楽しい（71 名）、 ややつまらない（14 名）、つまらない（1 名）</p>
<p>4 今 後の 活 用 計 画 等</p>	<p>①英語教育—動機づけされない生徒に対する授業の進め方 反復練習や補充学習の計画を 1 年間の中で計画を立て、実行する。また、彼らとの信頼関係を更に深めていく。</p> <p>②道徳教育 副読本の活用による道徳の授業だけでなく、ゲストティーチャーなどの活用、また、自作の資料づくりなど、さまざまな面から生徒の心情に訴える道徳の授業を工夫していく。</p>

平成17年9月14日

平成17年度 校内研修会・資料

道徳研究授業（平成17年9月7日実施）・協議会について

1. 今回行った道徳授業の内容

- ・ねらい 集団の向上
- ・運動の苦手な俊彦を運動会の学年種目・大縄跳びに入れるか、どうか。
- ・班で意見の交換をする。
- ・実際に行われたビデオを観る。(約5分)
- ・道徳部会の研究主題「地域・保護者との連携」に関連してゲスト・ティーチャー・関根健一先生の話聞く。(保護者の立場としての話)
- ・まとめ
- ・感想

2. 当日行った授業の様子

- ・生徒は、書く活動、話し合いの活動など、よく活動していた。それにより、予定よりも、生徒の活動の時間が長くなってしまった。
- ・始めの意見では、俊彦を入れるが30人 俊彦を入れないが8人だった。
- ・「あと何分」と時間に追われた雰囲気になってしまった。時間がなく、ビデオ鑑賞の時間がとれなかった。また、きちんとまとめることができなかった。中途半端になってしまい、折衷案を選ぶ生徒がほとんどになって終わってしまった。
- ・関根先生の話が短くなってしまった。

3. 協議会での意見

- ・生徒は、よく取り組んでいた。あの短い文章で、あそこまで、イメージをふくらませ、場面を想像し、意見を書いている様子は感動した。忍中の生徒は本をよく読んでいると聞いたが、その表れだと実感した。
- ・忍中の生徒は、考える時間がたくさんつくれる環境にあると思うので、さまざまな授業などで、そのような時間をつくってほしい。
- ・50分でやる内容にしては、盛りだくさんであった。ねらいを1つにしぼった方がよかった。
- ・道徳の時間を流動的に考えるとよい。例えば、柏葉中学校の時間割は、道徳の時間の後に総合の時間になっている。道徳の内容によって、50分以上で授業をすることができるようになっている。また、道徳を実施する事を優先するために、与えられた時間によって指導方法を工夫することができる。
- ・「俊彦を入れて跳ぶ」「俊彦を入れないで跳ぶ」どちらの意見も書かせてもよかったのではないかと。
- ・俊彦の立場をより深く考えさせた方がよかった。
- ・ビデオ活用の注意

- ・道徳の教材に関する2つの種類
 - ①答がわかっているもの（大人が導く事柄）
 - ②集団生活をしていく上で、学級で解決していくもの

- ・生徒は落ち着くところで結論を出す。
→教師は「どうしてこの題材を使ったのか、何を伝えたかったのか」方向性をも導くことが大切である。

4. 講師・内藤幹夫先生から

- ・教えるべき事は、きちんとしつけている。
- ・道徳の授業は、「木（形式・時間など）も見て、森（目標など）も見る」
- ・勝ち葛藤（本人の前で投票することは、本人にとって厳しい）から、自己統制（俊彦の立場）の方向で最後は考えないといけない。
- ・資料の扱い方の難しさ

5. その後の授業

- ・俊彦の立場について、考える。
- ・ビデオを観る。
- ・感想を書く。

5. 生徒の感想

- ・ビデオを観て、俊彦がみんなと跳べて、よかったです。俊彦が素直に「跳びたい」と言えるクラスは、とても素晴らしいクラスだと思います。クラスみんながステキでした。（女子）
- ・俊彦のがんばりと、クラスの人たちのフォローがあったから、本番で跳べたと思います。（女子）
- ・ビリでも今まで連続して跳べなかった俊彦が跳べるようになり、クラスの団結力も強まった。このことが勝ち負けよりも大切かなと思いました。（女子）
- ・俊彦の「跳びたい」という気持ちが71回も跳ぶことにつながったと思います。（好）
- ・僕なら、多分出ないと思うし、俊彦は勇気があると思いました。（男子）
- ・最後の「みんなが跳びながら泣いていました」というところで、とても感動しました。こんなクラスになりたいです。（男子）
- ・運動会では、勝つこと以外にも意味があるんだなあと思いました。（男子）

- ・ビデオでは、自分が思っていた結果と違う結果だったので、びっくりだった。でも71回跳べてよかったです。（女子）
- ・71回は、まぐれだ。俊彦が跳んでいなかったらもっといけたはず。（男子）

（作成者・伊藤真知子）

平成17年度台東区台教研中学校道徳部会 指導案

授業者 台東区忍岡中学校
教諭 伊藤眞知子
ゲストティーチャー 関根 健一

1. 日時 平成17年9月7日(水) 5校時(13:30~14:20)

2. 授業学級 1年2組 生徒数39名 (男子20名 女子19名)

3. 学級の実態

明るく元気な生徒が多く、学級のために進んで活動する生徒が多い。しかし、時に相手の立場になって考えられず、自己中心的な行動する生徒もいる。

4. 主題名 集団生活の向上(内容項目 4-1)

5. 主題設定の理由

主に2つの理由がある。学級の実態で述べたように、一部の生徒ではあるが、時に相手の立場になって考えられない生徒がいる。運動会で、学級の団結はより強まったが、この授業を通して、学級の団結・集団の帰属感を更に高めたいと考えている。

また、本校では、よりよい集団生活のために規範意識の向上をめざし、平成15~16年度台東区研究校として取り組んできた。今年度は、これまでの研究成果を全員で確認するとともに、より深めていく方向で取り組んでいる。規範意識の向上を基盤として人と の関わりの中で、よりよい集団づくりをめざしたいと考えている。

6. ねらい

自己が属する集団の意義について理解を深めさせる。

よりよい集団の在り方について考えることにより、自己の内面について考える。

7. 資料

読み物資料「みんなで跳んだ」 朝日新聞 1997年11月29日 夕刊コラム

ビデオ資料「みんなで跳んだ」 財団法人「共用品推進機構」

8. 本時の展開

	学習活動および発問	予想される生徒の反応	学習活動の援助と指導上の留意点
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・運動会の思い出 学年種目「忍のわたし」でみんなで協力して、1位をとったことを振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなで協力し、がんばった。 ・1位になって、うれしかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなで協力したことを振り返らせる。
展開 ① 25分	<ul style="list-style-type: none"> ・資料「みんなで跳んだ」前半を読む <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> ・なかなかうまく跳べな俊彦を入れるかどうか ・先生は悩む </div> <p><発問1> あなたがこのクラスの一員だったら、俊彦を入れて跳ぶことについて、賛成ですか？反対ですか？その理由は？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 紙（ピンク・青）を配布し、賛成はピンク、反対は青の紙を選び、その理由を書く。 ・ どちらかの意見に偏らないように心がける。 ・ 反対意見が出なければ、教師自ら反対意見を唱え、賛成反対の意見を対立させたい。 ・ 各班の発表を板書する。 	<p><賛成></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 俊彦を入れないと全員競技ではない。 ・ 俊彦もクラスの一員だから、跳びたいのではないか。 <p><反対></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 記録を伸ばして勝ちたいから、俊彦は入れない。 ・ 俊彦は自分のために記録が伸びなかったら、みんなに悪いと思うのではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 紙（ピンク・青）を配布し、賛成はピンク、反対は青の紙を選び、その理由を書く。 ・ どちらかの意見に偏らないように心がける。 ・ 反対意見が出なければ、教師自ら反対意見を唱え、賛成反対の意見を対立させたい。 ・ 各班の発表を板書する。
展開 ②	<ul style="list-style-type: none"> ・ 資料「みんなで跳んだ」後半を読む。 		

5分	<p><発問2> クラスでは、どのような結果になったのでしょうか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・数人の生徒が発言する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・俊彦は最初から跳んぴ、全員で跳んだ。 ・俊彦は声かけ役でがんばった。 ・途中でけんかになり、クラスが分裂した。 ・反対の人もいたが、折衷案通りでまとまった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・数人の生徒に発言させる。
まとめ 15分	<ul style="list-style-type: none"> ・ビデオ「みんなで跳んだ」を見る。 ・関根先生の話聞く。 ・本日の授業の感想を書く。 ・数人の生徒が発表する。 		<ul style="list-style-type: none"> ・これは、本当にあった話であることを説明し、ビデオを見せる。 ・子どもが運動会に出場させてもらえなかった保護者の立場から話す。 ・授業の感想を書かせる。 ・数人の生徒に発言させる。

9. 評価

自己が属する集団の意義について理解を深められたか。

よりよい集団の在り方について考えることにより、自己の内面について考えられたか。

10. この後の指導

～道徳部研究主題「学校と家庭や地域との連携の中で豊かな人間性をはぐくむ道徳教育について」の関連

生徒の感想、それに対する保護者からの感想や意見を学級通信や学年通信などで紹介し、学校・家庭との連携を更に深めていこうと考えている。